

眞平新報

2025年
(令和7年)
April 4

発行者 眞平
http://s-shimpei.com/



トランプタワーに挑む子ども(家での過ごし方がまた分らない)

懸案の新学期なんとか離陸

父の不眠解消にも期待



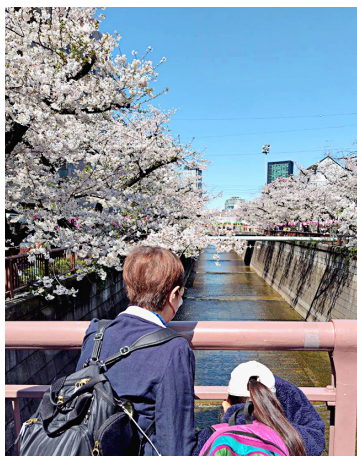
生憎の雨模様の朝に最初の角まで子どもの登校に付き添う妻(子どもが安定してくれれば私の不眠も解消すると思うのだが)

長らく懸案だった新学期がいよいよ始まった。新しい学童クラブは一日通ったきり行かなくなってしまうが、学校の方は一度休んだきり、なんとか毎日登校している。



ガラスドアに絵を描く子ども(家での過ごし方がまた分らない)

花見で乗り切る春休み 学童も実家も拒否



祖母に連れ出され日黒川でお花見(平日で混雑も少なかったようだ)

初日以降、子どもが新しい学童クラブに行かなくなってしまう、春休み中は妻と私も都合がつかないため、と私で交代で対応していたのだが、4日だけはどうしていいかわからない。



今年は複雑な気持ちで桜を臨む(四月なのに見通しが立たない)



集中して二日ばかりで組み上げ(ハセガワ1/72ウォーホーク)

未開封プラモデル活用 新生活の拠り所!!?

子どもの世話もいつか落ち着いて、制作することができるようになると、5年ほど前に買ったプラモデル。あれからずっと未開封のまま埃をかぶっていた。

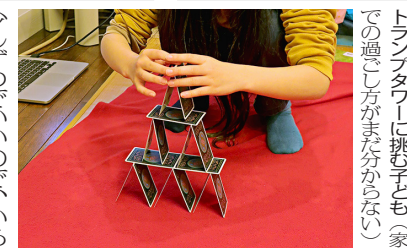


まずは塗装なしの素組みに挑戦(戦闘機ですが武装解除済みです)

まだまだ子どもに手が掛かるといっても理由のひとつだが、自分のために何かに取り組めるほどの余裕がまだ持てないことも放置していた原因のひとつだ。

ところが13日、その禁断の封を開けたのは、私ではなく子どもだった。前から興味があって、組み立ててみたかった。

新学期の生活の変化で、放課後や休日の過ごし方を模索中の我が家であるが、プラモデルが光となるかもしれない。



トランプタワーに挑む子ども(家での過ごし方がまた分らない)

今月の視聴覚 記録と記憶

59分 ジオグラフィイ 音楽
2018年 トム・ミツシユ

リバーの効いた心地よいメロディに控えながらも粒立ったりリズム。身体を動かすまでではないものの、頭の中にはしっかりと刻み込まれるバックビート。かつてこんな空間があったなあ、と思いつくのが、かつて代官山のキャッスルストリート界隈に点在した、ダウンナーながらもチリカフェ。またあるだろうか。

283頁 ゲームフリーク 遊びの世界標準を塗り替えるクリエイティブ集団 とみさわ 昭仁 著
ポケットモンスターを世に送り出したゲームクリエイター集団の発祥点はミニコミ誌発行だった!? そんな驚きの事実から、「ポケモン」の世界観の思考や発想までが網羅されたポケモンファン必読の一冊。新たな産業や市場が拡大していく黎明期の微熱のようなものまで一緒にパッケージされているところも善。

271頁 ことばの観察 2024年 向坂くじら 著

普段何気なく使っている言葉を、自身の経験や体験を通して、もう一度定義し直してみよう、という試み。何事にも一筋縄ではいかない著者が、うん／＼唸りながら言葉に接触していく様子が滑稽なのに真摯で、清々しく誠実で。再定義した言葉に関する著者の詩が、章の最後におまけのように付け加えているのもとても良い。

240頁 ぼくの道具 石川 直樹 著
自分の身体を通して世界を知る、という著者の哲学は道具に対しても貫徹されており、実際に使うことでその機能性や利便性を確認したうえで、厳選されている事が分かる一冊だ。ただその一方で、道具に対する愛着という、また別のパラメーターが介在してくる点も随所から読み取れて、著者の人間味や人間臭さが、道具からにじみ出てくる感じもまたとても良い。

267頁 言いたいことが 2024年 岡田 憲治 著
自分の状況や社会を変化させるための様々な提案が詰め込まれた一冊。この社会に横たわる家長制の根強さと弊害が「言いたいことを言えない」状況にさせていることに唖然とさせられる。

221頁 山影の町から 笠間 直穂子 著
都心の集合住宅から秩父の一軒家へと移住した著者。その土地の歴史や人々や動植物や自然との関係を深める中で、立ち現れてくる自分の気持ちや記憶や印象について、文学作品を通して丁寧に紐解き、時には新たな発見や思い違いにも思い至る。世界や他者の多様性の理解とともに、自分自身の多様性にも気付きを与えてくれるような、豊かな見識を教えてくれる一冊だ。